

## 日本橋の図像学

タイモン・スクリーチ

1603年、徳川家康によって江戸幕府が開かれた。足利政権の動揺からほぼ一世紀、室町幕府の崩壊からすでに30年が経過しており、この偉業は記念するに値する出来事だったのである。

徳川家の拠点となる町・江戸が、幕府の中心であることを全国津々浦々に知らしめ、荒涼たる遠方の「あずま」の国にある卑小な要塞に過ぎないという偏見を一掃しようと目論んでいた。

1603年当時の江戸は、大部分が湿地帯で、町の形状を成していなかった。排水工事が随所で執行され、海岸河岸の補強、居住区域の整備などが進められ、城も再建されていた。しかし、大規模な建物の建設事業は、未だ町としては見栄えのしない江戸にあって、民衆の目に触れやすい形で幕府の意図を強烈に印象づけるものとして重要だった。記念碑的な建築物は、徳川幕府の未来の展望を、全国の諸大名や庶民に対して明確に示すものだったのである。

### 橋梁の建設

徳川家はその記念碑として選んだのは、奇妙に思えるかもしれないが、一本の橋だった。それは「ニホンバシ」と命名された。江戸は、その東の境に大河が流れていたが、その新しい橋は江戸とその郊外を結ぶためその川に建設されたのではなく、城を取り囲む大水路を渡るために架けられたものである。当時その水路には特別な名前がなかったが、人々は「ニホンバシガワ」と呼び習わすようになった。(しかし、「日本橋川」が正式名称となったのは明治に入ってからである。)

それは、江戸に建設された、最初の橋梁だった。全長50メートル弱のその橋は、壮大であったばかりではなく、見た目にも美しいものだった。長さや美しさ以上に特筆すべきなのは、その橋幅である。その並外れた広さは、幾重もの人々の往来を可能にした。そしてこのことが「ニホンバシ」という名前の所以であると思われる。「ニホン橋」は、もともと「二本橋」だったものが「日本橋」になったと考えられる。さらに、「日本橋」という名前には、江戸を天下の中心に据えようという意図が働いている。「日本橋」という漢字は、1657年の大火のあと1659年に橋が再建されてから徐々に普及していった。幕府は日本橋を町の中心と宣言し、全国各地との距離を測定する起点とし、この慣

例は今日でも続いている。

このようにして新幕府の天下統一を記念するという概念には、少々注釈が必要であろう。もちろん町の中心を公的に定め計画する例は枚挙にいとまがない。ヨーロッパ各地の町には、必ず中心となる広場があり、その周辺には宮殿や教会、大使館や政府の公官庁が立ち並んでいる。このような広場には、ふつう国家の歴史、美德や秩序を記念するような、象徴的な名前が付けられている。例えば、パリのコンコルド（フランス語で「平和」の意）広場やロンドンのトラファルガー（大英帝国を崩壊の危機から救った戦いの名前）広場などがある。1606～7年にウイレム・ブラウ(Willem Blaeu)によって製作された有名な世界地図。が日本に輸入されていたため、17世紀初頭のヨーロッパの都市の様子は江戸時代の日本でもある程度知られていた。その地図は江戸初期の『二十八都市図屏風』(宮内庁蔵)の基礎ともなった。江戸の人々は、フランクフルトやロンドンなどのヨーロッパの都市には壮大な橋が架けられていて、ロンドン橋が中世の世界の不思議の一つに数えられていたことを知っていたのである。ロンドン橋は『二十八都市図屏風』に、あまり正確とはいえないが、描かれている。ロンドン橋を正確に描写した絵は、1615年には江戸に入っていたことがわかっている。

このように遠い異国の文化から発想を得て、目新しいものを考案・創出し、新しい町のためにこれまでにない記念碑を建設することは、新幕府にとって有意義なことであつたに違いない。

### 詩歌における橋と文化

このように、日本橋建設の背景には、外国からの影響もあったと推察される。しかし、東洋、特に日本特有の文化や概念が影響していることも無視することはできない。そもそも日本は山がちで、雪解けのあとは川の流れが激しくなるので、橋の数はそれほど多くはなかった。それでも橋が全くなかったわけではなく、その幾つかは歴史的・文化的にも重要な役割を果たしてきた。最も有名な例を二つあげれば、「佐野の渡し」と「宇治橋」であろう。

「佐野の渡し」(現在の和歌山県新宮市)は歌枕として和歌に詠みこまれている。中でも有名な例は1306年

に藤原定家が編纂した『新古今和歌集』所収の定家自身による和歌である。

「駒とめて袖打はらふかげもなし そのわたりの雪の言う暮（ぐれ）」

佐野の船橋は最新技術を駆使したものだった。というのも、早くなる川の流れの中に何艘もの船を押し流されないように固定するのは、決して簡単なことではなかったからだ。ただ、この橋は水面から高くそびえ立っているわけでもなく、視覚的には面白みに欠ける。橋を利用する人々にとっては、何とも心もとなく不安定で危なっかしい。そこで、この定家の歌に添えられる絵のほとんどは、橋自体ではなく、ただ雪の中にたたずむ定家の姿を好んで描写した。

「宇治橋」（現在の京都府宇治市）も歌枕で、「佐野の渡り」よりもよく知られている。この橋は京の町の出入りを管理するもので、それを巡る争いも絶えなかった。源平の合戦の折、平家の侵入を防ぐため源氏がその橋床を取り払ったという話は、特に有名である。この話は『平家物語』と『源平盛衰記』の両方に収められている。その他にも、戦とこの橋に関する話は多い。他の歌枕の例に漏れず、宇治橋も、単なる出来事だけではなく特定の感情とも結びついている。この橋の場合は、無常感である。平安時代、宇治は貴族の夏の別荘地で、家族や恋人のいる京から離れて宇治に置き去りにされた女性たちの悲哀を綴った物語や和歌が数多く残されている。中でも有名なのは再び定家の作である。

「さむしろや 待つ夜の秋の風ふけて 月をかたしくうちのはしひめ」

これには本歌取りという手法が使われており、905年に編纂された『古今集』所収の読み人知らずの歌が元になっている。

「さむしろに衣かたしき こよひもや我を松覽（待つらん）宇治の橋姫」

紫式部が『源氏物語』の中で「浮舟」の悲劇を語るのに宇治を舞台に選んだのは、これら二首の歌が詠まれた時代に挟まれた11世紀初頭だった。宇治橋を描写した絵も数多く描かれているが、これもまた江戸時代以前に遡るものは残っていない。現存の絵の多くには、輪廻を象徴するような水車が描かれており、狂気

に髪を振り乱した女に似せた柳があり、空にはしばしば半月、川面には実際に炭を運搬する小舟が何艘か浮かび、その地で育った馬が数頭放たれている。季節は、無常感を演出するのにふさわしく、秋で描かれることが多い。

このように、佐野の渡りと宇治橋の例は、歴史的に重要な地として、文化的に意味のある場所としての「橋」の力を、我々に見せてくれるのである。

## 仏教における橋と文化

こうして、橋には特定の場所と結びついた意味があることは明確になったと思うが、さらには一般的な意味があることを忘れてはならない。例えば、橋の建設は、仏教思想においては功德の行為である。古代中国では、奉獻のしるしとして僧たちが橋を築いた。なぜなら、橋は、人々や動物が川に流され死んでしまうのを防いだからである。日本においても同じことが営まれた。前述の宇治橋は、646年に山城坊道登という名の僧が建てたもので、橋のたもとには彼の功德を刻んだ石碑があった。この石碑の一部は、宇治橋断碑（うじばしだんび）と呼ばれ、日本最古の石碑断片として国の重要文化財に指定されている。

橋とはもともと実用性を重視したものである。しかし、それには象徴的な意味もある。例えば仏教において「悟り」を喩える「渡彼岸」という表現である。橋のように、人々を安全に間違いなく彼岸へ渡らせることは、信心深さを象徴する行為である。したがって、その場所や性質にかかわらずすべての橋が神聖なものであると見なすことができる。渡彼岸によって、すべての橋は人々を死とよみがえりの境地へと導いているのである。

この「悟り」と「渡彼岸」の視点に照らすと、日本橋はまさに黄泉の世界への入口だったと考えられる。この橋は、京方面から続く東海道の終点で、日光道中（または日光街道）の始点に位置していた。日光道中は、1617年家康が日光に埋葬されて以来、徳川幕府における最も神聖な死の場所へと通じる道であった。日光道中には日本橋から23次の宿場があり、第一宿の骨ヶ原（小塚原）の千住は江戸の仕置場で、最後の宿場鉢石を過ぎると御神橋（ごしんきょう）があり、神聖なる日光へと続いていた。このように、日光道中は橋に始まり、橋に終わったのである。

東海道の最後の宿場は品川で、江戸の町を抜けて日本橋を渡った「彼岸」も品川町と呼ばれていた。この事実によって、それら二つの「品川」の間にある江戸の町の空間が崩壊する。要するに、日本橋を渡り彼岸

の「品川」に到着するときには、旅人はすでに最後の宿場町品川を経てきているわけで、その間にある江戸の町全体も「彼岸」、つまりは悟りの地となるのである。

日光道中と同様に、東海道も橋に始まり橋に終わった。始点の京の都では、五条大橋が鴨川の両岸を結んでいた。

日本橋の宗教的な意味合いについてさらに付け加えれば、東海道は日光道中よりも人の往来が激しく、周知のように53次の宿場が置かれていたが、この53という数字が特別な意味をもつのである。それは善財童子（ぜんさいどうじ）が悟りを開くために歴訪した場所の数と一致するからである。この説話は、日本仏教の經典のなかでも最も広く読まれた『華嚴経』の最後にして最長の書「入法界品」に著されており、古くから万人に親しまれていた。善財童子は智慧の菩薩と呼ばれる文殊菩薩によって遣わされ、何人もの善知識から教えを受けるための旅に出た。はじめの50人の善知識によっては悟りを開くことがかなわず、51人目の弥勒菩薩によって文殊菩薩の元へ戻らされた結果、文殊菩薩が52人目の善知識となった。文殊菩薩は善財童子を53人目の普賢菩薩の元へ遣わした。善財童子に真実の智慧を体得させ、壮麗な邸宅が建ち並び無限の美が存在する宇宙を顕示した。53人の善知識と東海道53次。江戸は、人が求道を開始するときの心境を象徴していた。つまり、知らないことが多く、これから未知のものを探索していこうという状態である。このことは、まだ京の都に比べると開発は遅れているが将来の可能性に夢が膨らむ、当時の新都市としての江戸のイメージにかなっている。また、善知識歴訪の旅と江戸から京へ向かう東海道の旅を重ね合わせてみると、旅人は50次目の水口までは悟りを開くことはできない。石部に至って弥勒に出会い、草津で文殊、寺町である大津で文殊、そして宇宙としての京へ到着する。こうして江戸は、京の優勢を認めているのである。

### 実際の場所としての日本橋

このように、日本橋にはさまざまな意味があった。しかし、それが実際に存在した場所であることを忘れてはならない。絵の中では多数の人々で混雑した様子が描かれているが、それらの人々の大半は日本橋の哲学的な意味など考えてもみなかったであろう。

日本橋を描写した絵で最も古いものは、1620年頃の作品『江戸名所図屏風』（出光美術館蔵）である。橋のたもとには両替商が立ち並び、日本全国から人々が集まってきていたことがわかる。次に古い作品が、1650年代後期の『江戸図屏風』（歴史民俗博物館蔵）である。

両替商の姿を消してしまっただが、橋の交通の往来は相変わらず激しく、あらゆる階層の人々の姿を見ることができる。この橋は、さまざまな種類の人々が行き交う場所だったのだ。

日本橋は中央部が盛り上がった弓形で、その中央部はその地域で最も高く見晴らしのよい場所でもあった。計画的に道が基盤の目のように張り巡らされた北京や京の町並みとは異なり、江戸は行き当たりばったりに発展したために、遠くまで見通しの利く場所が非常に少なかった。他の城下町のように、江戸の道はそれぞれまっすぐで短く、それがまた別のまっすぐで短い道とさまざまな角度で交差して、一種のパッチワークを形成していた。これが外部からの敵を町中で道に迷わすのに役立っていた。日本橋から日本橋川を見下ろす眺めは極めて計画的なもので、他に類を見ないものだった。橋の上からは、城の方角が一望できるものの、視界が開けるのは道ではなく水路に沿ってなので、直接道伝いに城に近づくことはできない。日本橋川が御堀に通じ、道二堀まで続き、さらに江戸城の表門の中へとつながっているのである（図1、葛飾北斎『富嶽三十六景』より）。そして、このような眺めは、権力と規律を視覚的に示すよう、細心の注意を払って計画されたものだったのだ。

のちに、日本橋川が御堀に入るところに一石橋が、道二堀には銭瓶橋がそれぞれ築かれたが、はじめの計画では、日本橋川から、全国の権力の中枢まで何らの障害物もなく見渡せるようになっていたのである。より正確に言うならば、1603年当時江戸城は唯一の権力の中枢ではなかった。1615年に豊臣家が根絶してはじめて、江戸城が誰もが認める中央権力となり、日本橋が江戸ばかりではなく全日本の中心地となったわけである。

この日本橋川を見渡す眺めは、西の方角にあった。したがって、東から昇る朝日が天守閣をきらきらと金色に照らし出す様を見ることができたのである。おそらくこれが理由で、当時、多くの旅人が金色に輝く江戸城の様子を書き記し、ヨーロッパ人は将軍の城が本当に黄金でできていると勘違いしたのかもしれない。

日本橋川の両岸には蔵が建ち並び、日本全国、さらに世界中から、城での御用のため江戸に集積した物品の数々が納められていた。それらの品々はすべてこの地を拠点に、注文に従って発送されたり、またはそのまま貯蔵されたりした。軒を並べた蔵は延々と御堀まで続き、その蓄えの豊富さを表していた。この光景は、流通手段が寸断され物品の入手が困難で、窮乏と飢餓に明け暮れた百余年にも及ぶ戦乱の時代を経験した当

時の人々にとって、特に素晴らしいものであったに違いない。綿々と城へと続くこの有り余るほどの物資を目の当たりにし、江戸がこのように潤沢なのは城の警備が強固であるが所以であることと実感したのである。この城は一般には「江戸城」と呼び習わされていたが、正式には千代田城という名前だった。徳川幕府が千代にわたり安泰で水田潤い、人民に恒久の平和と日々の糧をもたらすことを願って名付けられたものである。特に、江戸川と御堀の合流点に一石橋が建設されてから、立ち並ぶ蔵の先には「一石」（一年に一人の人間が生きていくのに必要な米の量）があるということで、この発想がより強められた。

さらに、日本橋からの眺めには、もう一つの重要な要素があった。左手にそびえ立つ富士山である。町中で最も高い建物は江戸城の天守閣だったが、それよりも唯一高くそびえ立つのが富士山だった。富士山は江戸に幕府が開かれるずっと以前から日本の象徴であり、まさに「不二」の山、「不死」の山であった。しかし、京の都からは富士を見ることはできなかったため、江戸からの富士の眺めはこの東国の町の権威を高めることとなった。このように、日本橋からの眺めは、政治権力に対する畏敬と自然に対する崇敬の念を組み合わせたものだったのだ。

当時、多くの人々は、この素晴らしい眺めを堪能するため日本橋の上で足を止めた。先を急いで立ち止まらずに通り返る場合でも、馬上の者は鞍から腰を浮かせ、歩行者はつま先立ちになったり首を伸ばしたりした。松倉蘭蘭（まつくららんらん）は1706年に著した「富士の賦」の中で、日本橋を富士見の四名所の最初にあげている。

「不二は日本の蓬莱山なり・・・日本、両国の橋上には、馬上の人の首をめぐらし、赤坂、駿河台には乗物の窓に眸（まなじり）をさく」

京は江戸の丁度西にあたったため、日本橋の上からは、まず倉（豊穰）、そして城（平和）、さらには富士（不老不死）が見渡せ、その向こうには実際には見えないが京の都（太古）、そしてさらには至福の極楽浄土まで続いていたのである。

日本橋からは、また別の光景を見ることもできた。それは城とは逆の方角にあったが、日本橋の図像学を語るうえで欠くことのできない一部である。この光景とは魚市場、もしくは魚河岸と呼ばれる場所である。これは芝河岸、中河岸、地引河岸の三つの地域に分かれていた。当時、魚介類は日本のほとんどの地域では

高級品扱いで、庶民の常食になるには至っていなかった。したがって、京の都においてでさえも魚介類の消費量はそれほど多くなかったわけだが、江戸の町には比較的豊富な魚介類が流通していた。これは江戸の地形と密接な関係があった。品川の海岸沿いには浅瀬が広がっていたが、平底舟ならば容易に岸につけることができる深さもあり、漁には最適な条件が揃っていた。さらに、もともと湿地の排水のために発達した水路網は、海から市場まで、さらに仲買人へそして家庭への迅速な運搬を可能にした。城から目をそらすと、左手には魚河岸が見えた。右手には蔵が建ち並び、その向こうには江戸橋が架かっていた。一日の出来高が一千両にも及ぶといわれた活発な市場が、江戸から日本橋、蔵、城、さらに遠く富士山へとつながっていたのである。この市場が主に庶民を対象としたものであったことを考えると、それが城と富士山を中心とした政治的権威を象徴する眺めとは、性格が異なるものだったと思われる。むしろ、日本橋の裏方に据えられた、もう一つの意味を構成していたのだと考えるのが妥当だろう。

日本橋での経験は、江戸末期の町の様子を題材に多数の作品を残した北斎の浮世絵版画の中に見ることができる。1800年の『東都名勝一覽（とうとめいしょういちらん）』には、日本橋から江戸橋方面を眺めた情景が描かれている（図2）。この絵では、視点がねじれていて、左手に魚河岸まで展望できるようになっている。画面前方では、人々が豊富な物資を担いで日本橋を往来し（物資に恵まれたのは城だけではなかったのである）、特に魚であふれた大かごが目立っている。

これと似た情景は、同じ北斎画の『絵本東都遊（えほんあずまあそび）』にも見ることができる（図3）。この題は、今日でも東照宮などで演じられる古代の雅楽「東遊（あずまあそび）」をもじって、江戸の数々の名所を巡りながら「東方に遊ぶ」ことを意味している。初版は1799年に白黒で出版されたが、1802年にはカラーの短縮版が発行された。この視点からは富士山を見ることができない。というのも、北斎は再び魚河岸を見せるため、視点をねじっているからである。右手の庶民の生活の忙しい様と、左手の特権階級の生活の秩序だった静けさが対照的である。北斎の版画は安価で売られ町人を対象にしたものだったが、画面には町の民衆に混ざって武士の姿も見られる。橋を渡る大名行列。城も、雲と木々の合間から、ひっそりとその姿をのぞかせている。

## 日本橋の周辺

日本橋の意味を考察するにあたって重要な場所は他にもある。橋の上から実際に見ることはできないが、徳川幕府にとって重要な場所が橋の周辺に点在していた。それらはすべて城へ向かって右手に集中している。つまり、橋を渡って「彼岸」にある場所である。ここでは三つの建物について詳しく述べたい。

一つ目は「金座」と呼ばれる金貨の鑄造所である。その創設は日本橋よりも古く1601年に遡る。この広大な敷地を有し、固い警備で守られていた場所は、將軍の中央銀行として機能していた。(なお、現在でも日本銀行がこの場所にある。)1612年、家康の隠居した駿河の国、駿府の城にあったもう一つの金座がこの土地に移転し、二つの金座が合併した。通りの左手(つまり日本橋に近い方)は本両替町(ほんりょうがえちよう)で、そこでは金銭の両替が行われた。しかし、両替の仕方は前出の出光美術館の屏風に描かれているものほどこい加減ではなく、金座においては、全国での各種通貨の利用状況に応じて相場が定められていた。また、その政治的な重要さから、金座の建物が描かれることはなかった。金や貨幣を扱っていたというだけでなく、御堀を渡って城へ到達する主要な橋の一つ常葉橋(ときわばし、もとは大橋と呼ばれていた)が、ちょうど金座の前を通過していたのである。

二つ目の場所は、日本橋から見ることができなかったが、聞くことが可能だった。本両替町の隣は本石町(ほんごくちょう)と呼ばれる区域だった。日本橋が完成してまもなく、徳川秀忠は時之鐘を江戸の町に寄贈し、それがこの地に設置され江戸の名物になった。それまで、江戸には時刻を統一する制度がなかった。ほんの一握りの人々しか時を告げる道具を所有することができなかった当時、時刻の統制は困難を極めた。江戸市中に時を告げることのできる鐘が必要とされていた。そこで將軍が自分の城内で使われていた鐘を、この用途に差し出したのである。鐘を町に寄贈することによって、城内の秩序が広く町中に行き渡るようになったのである。

この場所の正式名は「本石町(ほんごくちょう)」だったが、それは当時、「本刻町」とも書かれた。その鐘は江戸全域の時を管理するもので、他に八つの鐘が赤坂、本所、上野、芝、目黒、市ヶ谷、浅草、四谷に設置され、本石町で刻まれた時をリレーして伝えた。つまり、正確な時刻は日本橋から発信されたのである。

本石町の鐘は、1657年、1666年、1679年、1711年の火災で焼失したが、その度に改鑄された。最後に鑄造された鐘は現在、実際に使われていた場所に程近い日

本橋小伝馬町十思公園の中に吊り下げられている。初期の鐘槽の大きさはわかっていないが、1712年製の現存の鐘が収められていたものは、正面の幅が20メートル以上、奥行きは35メートルにも及んだ。この鐘の管理には辻源七を名乗る役人が担当し、江戸のどの職業にもいえることだが、代々親から子へと役職が引き継がれていった。もともと將軍から町への贈物だった関係で、新しい鐘や大がかりな修理が必要な場合は、將軍家が代金を支払った。しかし、日々の管理は永楽銭と呼ばれる税金でまかなわれ、付近の住人410k軒から月々一文の額で徴収されていた。

さらに興味深いことに、秀忠の死後の1634年、跡を継いだ家光は御代替りの一環として関西を歴訪。これを記念して、大阪の町にも時を知らせる鐘を寄贈した。このことは、いわば家光が江戸を発つとき正確な時間を運び出し、江戸に戻るに際して大阪に置き土産としてのこしていったようなものである。大阪の鐘は「釣鐘」として親しまれ、今では鐘は失われてしまったが東区の釣鐘町という地名に残されている。

第三の場所は、本石町の鐘からほんの数軒離れたところにあった。長崎屋源右衛門が代々取り仕切っていた「長崎屋」である。それは参府のため、すなわちオランダ東インド会社の所用で長崎の出島に駐在し、將軍に謁見するために江戸を訪れたヨーロッパ人の宿所だった。1609年から1790年にかけて参府はほぼ毎年行われたが、松平定信が五年おきと改定してからは1794年と1798年に執行された。そして、1799年オランダ東インド会社が倒産してからも、1850年までは不規則ながら何度か参府が続けられた。一行は通常三週間ほど滞在し、彼らの到着と滞在は、江戸の政界や庶民の生活の中で重要な年中行事だった。

オランダ人は長崎屋を「大使館」と呼んでいたが、江戸に人々の間ではもっぱら「紅毛館」や「紅毛人御旅館」などと呼ばれていた。この宿については、ヨーロッパ人から多くの不満が出ている。1640年、オランダ商館長は「石を投げつけられ、憂鬱だ」と記し、一世紀以上経た1766年にはオランダ人外科医が「我慢はできるが、遠方からはるばるやって来た使節団にふさわしい場所ではない」と不満を漏らしている。しかし、ヨーロッパ人は、江戸のど真ん中というその位置の重要性を十分に理解していなかったようである。幕府は、世界の果てから人々を呼び寄せ、自らがあつらえた権力の図像の中に彼らを位置づけることができるのだということを、町人たちに見せつけたかったのだ。ヨーロッパ人は、非常に多くの見物人がやってくると何度も書いている。前述の外科医は1776年次のようにに記し

ている。「宿舎の外の通りにはたむろする少年たちがほとんど絶えることがなく、我々の姿を少しでも垣間見ようものなら、呼び声をあげたり大騒ぎをしたり、時には、我々を見るために向かいの家の塀によじ上る者までいる。」さらに、「はじめのうちは、この国の知識人や名士たちが面会に現れたものだが、後半になると商人や他の庶民までもが客人として訪れるようになった。」その立地は大名などがお忍びで訪れるのにも都合良かった。歴代の商館長たちが夜間に何人ものこうしたお忍びの訪問を受けたと記録している。

前述の北斎画『東都遊』の初版は1799年で、すでに毎年執行されなくなっていた参府があった翌年である。その年の参府の際、商館長ガイスペルト・ヘミーが長崎への帰路で急死し、それが服毒によるものと噂された。紅毛宿の長崎屋はスキヤンダルを中心となり、北斎の画集にも取り上げられたわけである。そこには建物の詳細な描写はないが、物見高い群衆が、外からでも一目見ようと訪れている様子が描かれている。この建物が政治的に重要なものだったため、『東都遊』の中で唯一この絵には場所の名前が明記されていない（日本橋の絵を参照、資料1）。長崎屋を描いたものとして知られている絵がもう一枚あり、1856年の天明老人（てんめいろうじん）編、広重画『川柳江戸名歌図会（ずえ）』の中に収められている。ここではその場所の様子が多少なりとも明確に描かれている。外壁の表札は、不明瞭ながら「紅毛人旅館」もしくは「紅毛人御宿」と読みとれる。見物人の姿はないが、にぎやかな繁華街に位置していることがわかる。

当初、オランダ人一行は陽暦の12月に長崎を立去り、翌年2月に江戸に到着するのが習わしだった。しかし、1657年の将軍への目通りを二日後に控えた日に大火が起り、翌年1658年には目通りの前日に大火があり長崎屋が焼失し、その次の年にも江戸は大火に見舞われた。この三年連続の不祥事に幕府は恥じ入り、1660年から、冬は火事が多発するというので参府の日程を数週間ずらすことに決定した。これにより一行は陽暦の正月明けに出立し3月に江戸到着となった。（もっとも、この決定にもかかわらず、1660年の参府の際には再び大火があり長崎屋は焼失した。）その後、参府の日程はさらに繰り下がり、一行の江戸到着は桜

の咲く陽暦の4月ということになった。芭蕉の次のような発句が残っている。

甲比丹もつくばはせけり君が春

阿蘭陀も花に来にけり馬の鞍

一句目には「春」という季語があるが、二句目には季語がない。これは、参府が春になってからというもの、「おらんだ」が春の季語になったからである。

長崎屋と本石町の鐘は隣り合わせで、人々は通常それらをひとまとめに考えていた。幕府はそれらを通して時間的にも空間的にも統治したわけである。広重の絵に書かれている川柳は次の通りである。

是にのみ通詞はいらず 分かるらん かびたんの聞く  
石町のかね

他にも多くの発句や川柳が残されている。例えば次の詠み人知らず。

石町の鐘阿蘭陀まで聞こえ

おかしなことに、欧州人の書き残したものの中に鐘に関する言及は全くなく、鐘櫓に言及したものが二例あるのみである。一つは、1660年の参府の時のもので、参府の一行は大火の夜長崎屋から避難し、翌朝戻ってみると建物は焼けて跡形もなかった。「その辺一帯、見渡す限り、廃墟と灰と化していた」と商館長は書いている。しかし、幸いにも貢ぎ物を保管した倉は焼け残り、「我々の宿から四五軒先の大きな時計の吊り下がっている場所だけでも、十二人が焼死したそうだ。」二つ目の例は、その20年ほど後のことで、ケンペルが「我々の旅宿の前の左の方には、木造の鐘櫓があった。」と記述している。この二つの例をのぞいては、この江戸の鐘が「阿蘭陀まで聞こえ」たことはなかったようである。

図1



図2

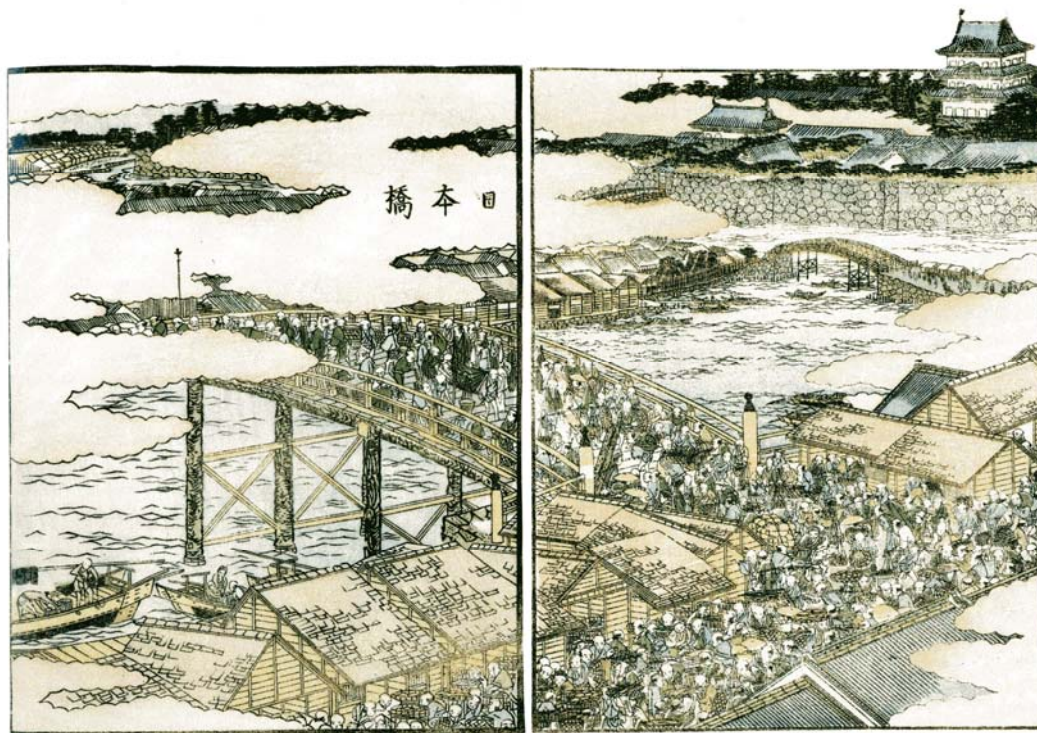


図3

